

「もう枯れてる」って言いましたよね?!

バツイチ45歳のバーのマスターを
酔った勢いで襲ったら、雄の顔で
巨根にどちゅどちゅ♡されちゃいました

Sample

最近の私は、不連続きでいいことが一つもなかった。昨日は機嫌の悪い上司にうっかり話しかけてしまって、八つ当たりのようなお説教をされ、今日は後輩のミスのカバーのため一緒に残業していたら、当の後輩は彼氏と約束があるからと先に帰ってしまい、予定よりも長く残業することになった。

まあ、彼氏もないし。明日の休みも予定の一つもないし、いいですけど……

一週間の積もった疲れはお酒と共に流し込んでしまおうと、通い慣れたバーのカウンターで一人グラスを傾ける。

「次は藤間さんのお任せでもいいですか？」

華奢なカクテルグラスを空けて間もなく、カウンターの向こう側にいる男性……このお店のマスターの藤間さんにそう告げると、彼は少し考えてから「かしこまりました」と静かにボトルを二つ手に取った。

「フレンチ・コネクションです。甘口ですけど、少し強いですよ」

優しい声と共に、先程のカクテルグラスとは対照的な底の厚いロックグラスが差し出される。店内の淡い光を受けて、深く透き通った琥珀色の中で、カラン、と氷が揺れた。

両手でグラスを包み込むように持ち上げると、ふわりと鼻をくすぐる重厚な甘いアーモンドに似た香りは、確かにアルコールが強そうだった。人よりお酒は強い方だと自負していた。けれど、今日は残業の疲れのせいだろうか、喉を流れる琥珀色がじわじわと体の芯から火照るようだった。

「朝日さん、今日は少しペースが速いんじゃないですか？」

「飲みたい日も、あるんですよお」

「お酒の代わりに、僕が話聞きましょうか？」

「うーん……、最近いいことないなあって」

「何かあったんですか？」

「仕事の愚痴だから面白くないですよ、それに……」

最近の悩みの一つは、他でもない、藤間さんのことだった。

初めてここに来たのは半年くらい前。たまたま友達と二次会と称して飲みに来たことがきっかけだった。お店の雰囲気と美味しいカクテルが忘れられずに週末には一人でも来るようになり、藤間さんの穏やかな接客に、気が付けば足を運ぶ理由は変わっていった。

こうしてカウンター越しに会話することはあっても、お客の一人というポジションから抜け出すのはなかなか難しかった。私もガツガツ行くタイプではないし、藤間さんも私をそういう対象としては見ていないだろう。

「……あとは、恋愛がうまくいかないっていう悲しい話です」

「恋愛ですか……、僕は昔のことすぎて忘れてしまいましたね」

藤間さんは、若い頃に結婚しバツイチになってから長いというのは聞いたことがある。そのせいか、やけに落ち着いていて、夜のお店で働いているのにギリギリしていなくて、隙がありそうでない藤間さんにどう踏み込んだらいいのかと私は思いあぐねていた。

重いグラスを傾けると、氷の揺れる音が静かな店内に響く。めずらしく今日は他のお客さんがおらず、ほんの少しだけ探るように言葉を続けてみる。

「バーのマスター………っていうか、藤間さんはモテそうですけど」

「いやいや、お酒が好きで細々とやってるだけです。それに、もう僕は枯れてますから」

（あ、また言ってる）

藤間さんは自分を枯れているだとか恋愛の仕方を忘れたなんて言っ
て、私含め、お客さんからこういう話を振られると、さっと躲してしま
う。

そんな風に謙遜するけど、藤間さん目当てのお客さんは少なくとも
と思う。いつだったか連絡先を聞かれていた時も、さらりと嫌味なく躲
していたのは記憶に新しい。

「……好きな人に、意識してもらうにはどうしたらいいですかねー……、
女性として見られてないというか」

その好きな人は目の前のあなたですとは言えずに、再びグラスに口を
つける。その答えはきつと藤間さんから得ることは難しいだろう、甘く
どこか痺れるこのカクテルを藤間さんが選んだ理由をぼんやり考えな
がら、彼の言葉を待つ。

藤間さんはグラスを拭く手を止めると、カウンター越しに私を見つめ、ふっと口元を緩めた。

「朝日さん、こんなに素敵なお女性なのに」

「……もう、お世辞はやめてください」

「嘘は言いませんよ」

じゃあ抱けますか、とはさすがに言えず、お世辞でもそう言ってもらえただけ今日は良しとしよう。いや、今日も……か。わかっていたけれど。

（この調子じゃ、望みは薄いなあ）

まだグラスに残っていた琥珀色を流し込み、心の中でそっと深く溜息を吐いた。



「——朝日さん、お水飲めますか」

どこか遠くから、優しい声が聞こえる。重い瞼を開けると、少し眉を下げた藤間さんが心配そうに私を見つめていた。

「あ……え、藤間、さん……？」

「起こしても大丈夫ですか？」

そう言われて、自分が今ベッドに横たわっていたことに気が付く。やたらと大きなベッド、どことなく淫らな灯りの間接照明、ガラス張りのお風呂。ここがどこかなんて、寝起きの頭でもラブホテルということをすぐに理解した。え、あれ、私どうしてここに……？

まだ思考が追い付かないまま藤間さんの腕に抱かれて体を起こし、

差し出されたミネラルウォーターを一口飲む。冷たいそれが喉から胃へとゆっくり流れていくのを感じるほどに、まだ体の芯はアルコールによって熱を帯びているようだった。

「朝日さんの家に送りましたんですけど住所知らなくて……、僕の家と悩んだんですが……、近くで入れそうなところがこういうところしかなくてすみません」

「あ……、い、いえ、私こそごめーわく……おかけして……、すみません……」

「お疲れの様子だったから、いつもよりお酒が回るのが早かったかもしれないですね。もっと考えてお出しすべきでした……、すみません」

「と、藤間さんは何も悪くないので……」

いい大人が酔い潰れるなんて……

そうだ、あの後おかわりしたあと、いつもより頭がふわふわして、他のお客さんがいなかったから藤間さんがずっと話してくれて楽しく

なつて……、それから……、あ、れ……？

まだお酒の残る頭で、お店での会話を必死に思い出す。恋愛の話から、藤間さんの好みのタイプを強引に聞いて、私にひとつも当てはまらないなあと落ち込んだりして、それで……

『藤間さんのタイプじゃないですね、私……』

『僕の話は別として、朝日さんは魅力的な方ですよ』

『またそういうこと言うんですね……、もお……』

『本当ですよ』

そうだ、そう言う藤間さんの優しい目の奥に、どこか一線を引かれた気がして——……、あ、待って、その後……

「私、変なこと、言ってますでした……？」

「『私のこと、抱けますか』って仰ってたことですか？」
「……っ！」

まるで今日の天気の話でもするかのように、藤間さんは顔色一つ変えずにそう告げた。

半ば絡み酒でそんなことを言ってしまった事实に、顔が熱くなっているのは残ったお酒のせいなんかではなくて、今すぐにこの場から消えてしまいたかった。藤間さんの顔が見れずに、飲みかけのペットボトルに視線を落とした。

「朝日さんが酔ってたのはわかってますから、大丈夫ですよ」

こみ上げる恥ずかしさに体を縮こませた私をよそに「気にしないで」と藤間さんはいつもと変わらない優しい声でそう言った。

(……、本当に、意識してもらえていないんだあ……)

その変わらない様子が逆に胸を締め付ける。あらためて思い知らされるとき、少し目の奥が熱くなって、視界が滲む。やだ、ここで泣いたら藤間さんをもっと困らせてしまうのに。

「朝日さん？ 具合悪いですか……？」

「……わたしい……、魅力ないですか……？」

「え……？」

ペットボトルの蓋を閉め、サイドテーブルに置く。静かな部屋に無機質な音が響いて、どこかまだ夢のような気がした。

「朝日さ……、……っ」

藤間さんの胸を押すと、不意を突かれたせいかわ、彼は簡単にシーツの

海へ体を沈ませた。その腰のあたりへと跨り、暖色のライトが逆光になって影を落とす私を、彼は驚いた表情のままで見上げていた。

「朝日さん……？ まだ酔ってるんですか？」

「そうかも、です」

お酒のせいにしたら、藤間さんは抱いてくれるのだろうか。

「……っ、朝日さん、だめですよ」

藤間さんのシャツのボタンに指を掛けると、彼の大きな手がそれを制すように重なる。その手を半ば強引に除けてボタンを外していくと、服の上からはわからなかった厚い胸板と、うっすらと割れた腹筋が露わになった。

「抱いてくれないなら、私が、しちやいます」

「……っ」

藤間さんの首筋に顔を寄せると、汗と整髪料が混ざり合ったような、男の人の濃い匂いがする。あ、この匂い好きかも。もっとそれを感じたくて深く息を吸い込むと、藤間さんは恥ずかしそうに身を振った。

「そ、そんなところ、嗅がないでください」

「だって、いい匂い……、ん……」

「……っ」

可愛い、そう言ったら藤間さんはどんな反応をするだろうか。一度その言葉は飲み込んで、代わりにそのまま首筋に唇を寄せる。それから、普段はきつちりとボタンの留めたシャツで見えなかった太い鎖骨に舌を這わせる。汗ばんだ体は少ししょっぱくて、けれど不思議と嫌じゃなく、どこか愛おしさすら感じた。

「朝日、さん……っ」

「ん……」

胸板から腹筋をなぞるように舌を這わせていく。藤間さんって実は結構鍛えているのだろうか。無駄のない筋肉は、灯りに照らされてうっすらと綺麗なラインを浮かび上がらせている。

「……っ、はぁ……」

しなやかな腹筋を舌でなぞり、おへその周りを舐めると、彼の唇から甘くどこか切なげな息が漏れる。

——もっと、私の知らない藤間さんを見たい。

「こっちも、していいですか……?」

スラックス越しにおへその下からゆっくりとそこを撫でる。「枯れてる」と言っていたから、もしかして全く勃たないのかもと思っていただ、そこはほんの少しだけ硬さを帯びていて、それだけで私もお腹の奥が甘く疼きを覚えた。優しく撫でると、むくりと布が押し上げてくる。

（あ、え、おっきい、かも……）

まだ柔らかさの残るそこは完全に勃起していないはずなのに、普段の優しい藤間さんからは想像できない質量を感じる。もしかして藤間さんのって、すごく大きかったりする……？

恐る恐るベルトに手を掛けると、まだお酒が残るせいか上手く外せずにかチャカチャと金属音が響く。回るアルコールで重たくなっていく脛と比例しておぼつかなくなっていく手に、不意に藤間さんの手が再び重なった。

「……だめですよ」

「あ……」

藤間さんが起き上がり、はしたなく捲れ上がっていた私のスカートを整える。それから乱れていたであろう前髪を優しく撫でて、私をそっと抱き締めた。異性というより、まるで子供をあやすように、とん、とん、と背中を叩いて。

「……酔っぱらいの悪戯は、ここまでにしてくださいね」

少し困ったような、でも私を諭すような藤間さんの目。

「とうま、さん」

続く言葉は見つからず、ただ彼の名前を呼ぶ。その瞬間、少しだけ彼の瞳が揺れた気がした。

「……寝ましようか、朝日さん、目がとろんとしていますよ」

瞼を下ろすように、藤間さんの手が私の視界を塞ぐ。少し硬い手のひらは温かくて、体を預けると藤間さんの心音が聞こえてくる。

「……、あんまり僕のこと、困らせないでください」

心地よいまどろみに包まれる中、優しい温度が触れた気がした。



(……あれ、なんかあったかい……)

ふと目を覚ますと、視界に飛び込んできたのは藤間さんの寝顔だった。優しい温かさを感じていたものは、藤間さんの体温だったことに気付き、思わず出そうになった声を飲み込んだ。

(え、なんで、あれ？ 昨日私……)

まだ思考のピントが合わないようで、記憶の断片を手繰り寄せていく。昨日は……そうだ、飲みすぎて、藤間さんが介抱してくれて、えっとそれから……、

(と、藤間さんのこと襲った……)

ぼんやりと霞んでいた映像はだんだんと輪郭をはつきりとさせていく。

告白どころかいろいろ飛び越えて、お酒の勢いで藤間さんを襲うなんて、恥ずかしいにもほどがある。顔から火が出るとはよく言ったもので、内側からカッと熱くなっていくのがわかった。

いつそ覚えていないことにしようか。ぼさぼさの頭でとぼけて、無かったことにしてしまった方がいいのかもしれない。

（……と、とりあえず、シャワー浴びようかな）

隣ですやすやと眠る藤間さんは、胸元まで布団が掛かっていたけど、バスローブを着ているようだった。

さすがに藤間さんも私の服を脱がすのは躊躇われたんだろう。皴になったブラウスとスカート姿のままだし、藤間さんが起きる前にせめて身なりだけでも整えておこう……

昨日の失態を象徴するように、穿きっぱなしのストッキングのせいで

足元が少し汗ばんでいる。先に脱いでしまおうと体を起こし、ベッドの上に座ったままストッキングを下ろしている時だった。

「……ちよつと朝から刺激が強いですねー……」

「……っ！ と、藤間、さんっ」

脱ぎかけのストッキングが恥ずかしくて、慌てて脱ぎ捨て、露わになった太ももをスカートで隠す。

藤間さんは枕元に置いてあった自分の腕時計を見て「まだ7時か」と独り言のように呟いた。寝起きのせいか間延びした口調で、なんだか頭がぼやぼやとしている姿に可愛らしさを感じて、胸がキュン、とした。

「朝日さんー……、二日酔いになっていないですか？ 大丈夫……？」

「あ……、それは大丈夫、です……」

「……じゃあ、何が大丈夫じゃないですか？」

無意識にそんな言い方をしてしまった、と気が付いた時には遅くて、藤間さんが体を起こして私と向かい合うように座り直した。少し着崩れたバスローブからは胸元が見えていて、それは昨日のことをより鮮明に思い出させた。

「それ、は」

「……、無かったことにしましょうか？」

「あ……」

藤間さんにとっては、無かったことにした方がいいのだろうか。だって、これからきつとお店に行きづらくなるし、ここはお酒のせいにして平謝りして忘れてしまうのがいいのかもしれない。

「朝日さん」

「……、無かったことには、しないで、ください」

「……」

「お、お酒のせいで、藤間さんのこと襲……、いろいろしてしまったのは、すみません……っ、でも、私、」

言うならもう、今しかないと思った。

「藤間さんのこと、好きなんです」

いや、今じゃなかったかも、と言ったそばから後悔して下唇を噛む。藤間さんは小さく息を吐き、咳払いをした。

「……、まだ酔ってますか？」

「よ、酔ってません！」

つい必死になって少し大きな声になる私に、藤間さんはまた少し困ったように眉尻を下げて、どこか自嘲気味に笑った。

「僕、朝日さんより、ずうっと年上のおじさんですよ」

「……っ、藤間さん」

だめならひと思いに振ってほしい。なのに、藤間さんの言葉に期待してしまう。

「……すみません、こんな予防線張ってしまうくらい、久しぶりなんです」

「え……？」

藤間さんの手が、そっと私の頬を包む。優しい目が私を捕らえて離さない。

「おじさんになって、誰かを好きになるなんて思っていないませんでした」

「……嘘」

「……、こんな嘘、吐きますか？」

「だって、恋なんてもうわかんないとか、枯れたとか言ってたじゃないですか……っ」

「こんなおじさんが……こんなに若くて可愛い女性に好意があるなんて、言えないですよ」

「……っ、ずるい、私ずっと……」

「すみません、こんな風になるの久しぶりで、臆病になって……情けないですね」

「これも歳のせいかな」なんて藤間さんは苦笑する。

「……、好みのタイプなんていきなり聞かれて、僕が内心どんなに焦っていたか、知らないでしょう」

「え……?」

「目の前の女性と反対のことを言おうと必死になってたおじさんの身にもなってください」

藤間さんの耳が、じわりと赤く色づいていく。やつぱり藤間さんはずるい、こんな一瞬で、私の心を掴んで離さないなんて。

「……朝日さんのことが、好きです」

藤間さんの顔が、ゆつくりと近づく。鼻先が触れる距離で「……キス、してもいいですか」と甘い声が鼓膜を揺さぶる。こくりと頷くと、少しかさついた唇が重なった。

「ん、ふ……」

重なっていただけの唇は、だんだん食むようなキスに変わる。柔く噛まれたり、舌先が唇をなぞって、じわじわと甘い感覚が襲う。まだ舌が絡んでいないのに、ずっといやらしいキスに、息が漏れていく。

（藤間さんのキス、なんかえっち……♡）

唇が愛撫されるようで、気持ちいい。もっと深くねだるように舌尖を出す、と、不意に藤間さんの唇が離れた。

「ふ、え……？」

「……、これ以上したら、僕、止まれなくなってしまうですよ」

いいんですか、なんて。

「……、もっと、してほしい、です」

「……、可愛い」

「あ、んう……♡」

くちゅ、と藤間さんの舌が私のそれと絡む。ゆっくり、形を確かめるように動く舌が、微かに水音を立てていく。厚い舌は私の口内を優しく犯して、上顎を愛撫する。

「あ、はあ……♡」

「……ん、可愛い……」

こんな甘くて気持ちいいキスは初めてかもしれない。ゆっくり氷が溶けていくような、まどろみにも似た心地よさと、時折くすぐられるように上顎を舐められて、体が熱を帯びていく。

藤間さんの手が撫でるように背中に回り、優しくベッドに押し倒された。

「……もっと、してもいいですか？」

「……は、い」

深く甘いキスに体が痺れて、藤間さんが腰の括れを撫でるとふりりと震える。ブラウス越しなのに、熱く硬いながらも滑らかな質感を感じる手に、体はすでに藤間さんを求め始めていた。

キスに夢中になると、気付けばボタンはあつさりと外されていて胸元が空気に触れる。ベッドと背中の中に手が差し込まれた理由を受け入れて背中を浮かせると、かぷりと耳たぶを甘噛みされた。

（待って、今日の下着どんなのだったっけ……）

上下が揃っていただろうかなんて考えている間にも、容易く外されたホックのせいでブラジャーが少し浮いて視界の隅に映った。

「……っあ、と、藤間さん、待って……！」

覆いかぶさる肩を慌てて押すと、顔を上げた藤間さんと視線がぶつかる。

「しゃ、シャワー、浴びてない……から」

「……ああ」

こんなタイミングでと思ったけど、藤間さんは呆れることも怒ることもせず「そうでしたね」と変わらず優しい声が返ってきてホッとする。……けれど、なぜか藤間さんは体を起こそうとはせず、私に覆いかぶさったまま動かなかった。

「と、藤間、さん……？」

「うん？」

「シャワー、浴びたいんです、けど」

「僕は気にしないですけど」

「わっ、私が気にするんです……っ」

「どうしてですか？」

「ど、どうしてって——……、あっ……！」

首筋に藤間さんが顔を埋めて、すん、と鼻を鳴らす。

「や……っ、藤間、さん……っ」

「いい匂い」

「……っ、そんなわけ……っ」

「ふふ、変態っぽかったですか？」

「そんなに嗅いだら恥ずかしい……っ」

「朝日さんも同じ事したでしょう、僕に」

彼の言葉に昨日の自分が鮮明に思い出され、何も言い返せなくなってしまった。けれど、やっぱりシャワーは浴びたいと藤間さんをお願いするも虚しく、起き上がろうとする体は簡単に押し返されてしまった。

「藤間さん……っ」

「昨日、朝日さんも僕の言うこと聞いてくれなかったから、だめです」

「やつ、それとこれとは……っ、あんっ♡」

「そんな可愛い声出しちゃうんですね、朝日さんって」

胸の輪郭をなぞるように、やわやわと胸を揉まれる。藤間さんの大きな手に包まれて、親指が段々と乳輪に近づいていく。焦らすような、愉しむようなその動きに、つい熱く息を漏らしてしまう。

「触ってないのに、乳首立ってきましたね」

「あ、あ……ん♡」

「触ってほしいみたいに、ツンってしてますよ、ここ」
「あっ、藤間、さん……っ」

ピン……ッ♡

「ひう……ッ♡！」

「乳首、ピン、ピン……ッてされるの好きですか？」

「あ、ん……ッ♡」

「ちゃんと教えてください？　乳首、こうされるの好きですか？」

ピンッ♡ ピンッ、ピン……ッ♡

「あ、あ……ッ♡ 好き、です……ッ♡」

「ふふ、可愛い」

「っあ♡ あ♡ きもち……っ♡」

「うん、乳首もうビンビンで可愛いですねー……」

れろお……っ♡♡

「ああ……ッ♡」

藤間さんの舌が、ねっとり乳輪をなぞっていく。何度かそれを繰り返すだけで、中心には触れず、焦れるほどにゆつくりと這うだけだった。それなのに先がじんじんと疼いて、早く舐めると言わんばかりに胸を突き出してしまった。

「……ふふ、我慢できなくなっちゃいました？」

「……っ、意地悪、しないでください……っ」

「意地悪されるの、お好きじゃないんですか？ ……こんなに乳首がいやらしく勃起しているのに」

ピン……っ♡

「ああ……っ♡」

悪戯に藤間さんが乳首を指で弾いて、甘イキしたみたいになが痺れる。熟れたようにツンと尖らせた乳首を、彼は指の腹で優しく撫でていく。優しい声と手の動きとは反対に、意地悪に焦らされてしまえば、彼が与えてくれる次の動きを期待に濡れた目で追いかけてしまう。

「乳首だけでこんなになっちゃいますね？ 可愛い……」
「藤間さん……っ」

「朝日さんの乳首、食べちゃっていいですか？」

「おじさんくさかったかな」と藤間さんは笑って、じゅるりと乳首にしゃぶりついた。

ぢゅうつ……♡

「あぁん……っ♡！」

「ん、乳首気持ちいいですか？　はぁ、こんなに勃起させて……、やらしい」

「あっ♡　あ♡　そんなえっちな舐め方……ッ♡　あぁんッ♡♡」

「ん……、舌全体でゆっくり舐められるの……、好きなんですわね」

「ん♡　す、き……ッ♡　あ、気持ちいい……ッ♡」

「そんなに腰浮かせたら、朝日さんのいやらしいところ、僕に見えちゃいますよ」

「……っ！」

無意識に腰をだらしなくへコへコと浮かせてしまっていたようで、捲れたスカートから曝け出された内ももを撫でられる。

「それとも、見せてくれますか？ 朝日さんのここ」

藤間さんの手がおへそのあたりをさすって、そのまま下着の中へ侵入してくる。いつもカクテルを作るあの手がいやらしく肌に触れるだけで、背徳感にも似た気持ちが私を襲った。下生えを越え、指先が這うように割れ目に沈んでいく。

くちゅ……っ♡

「ひ、あ……っ♡！」

「はは、もうこんなに濡らしてたんですか？ 意地悪しすぎちゃいましたね」

「あつ、やあん……ッ♡」

「おまんこ、もうとろとろにさせて可愛い……」

（藤間さんがおまんこ、なんて……っ♡）

たまに居る、悪酔いで下ネタを言うようなお客さんにも乗ることもせず、上手に窘めて躲す藤間さんからは到底想像もできない言葉に、ひどく興奮してしまう。もしかして、藤間さんって実はすごくえっちな人なのかもしれない。離婚してから女性関係はないなんて言っていたけど、指も、舌も、今まで感じたことがないくらいに気持ちいい。

「こら、こっちに集中してください？」

「え、あ、ああ……ッ♡ や、待って、そんなに中擦っちゃ、ああッ♡」

ぐちゅッ♡ ぢゅぷ♡ ぢゅぷぢゅぷ♡

（藤間さんの太い指で、おまんこぐちゅぐちゅされてる……ッ♡♡ 枯
れてるなんて嘘つき……ッ♡）

太く、少し皮が硬い指が、私のいいところを探すように擦っていく。
藤間さんがお店でグラスを差し出すとき、いつも私はその指先を見つ
めていた。短く切り揃えられた清潔感のある爪、何もしていないと言っ
ていたけど、荒れひとつない綺麗な指先。

だけど、若い人のように滑らかで白い美しさではなくて、太い関節、
骨ばった手の甲、優しい顔とはどこか矛盾した年齢を重ねた故の武骨さ。
そのどれもに、私は大人の色気を密かに感じていた。

いつもは綺麗なグラスやシェイカーを持っているその手は、今はこう
していやらしく、淫らに私の体に触れている、その事実甘い目眩を覚
える。

いつの間にか中の指が増やされて二本バラバラに動かされると、あら

れもない声が出てしまった。気持ちいいのに、襲う快感を逃がそうとして閉じてしまいそうになる震える膝は、藤間さんの空いた手で押さえつけられてしまった。

「ああッ♡ あ、藤間、さんッ♡ あ、だめ♡ あッ♡ ああッ♡♡」
 「そんなに締めつけて……気持ちよさそうですね、朝日さんのおまんこ」
 「んンッ♡ あッ♡ 気持ちいい♡ あ、あッ♡ もおいっちゃう♡」
 「ん、我慢しないでください……、朝日さん、イって？」
 「……っ！ イ、つく……♡♡♡」

耳元で甘く囁かれ、促されるように大きく腰が跳ねた。だらしなく足を開いて震わせていると、ゆっくり引き抜かれた指を、彼は目を細めて見つめていた。

「……はは、僕の指、糸引いてますね」
 「や、ん……ッ！」

「……気持ちよくなってくれたみたいで、よかった」

どこかホツとしたみたいに藤間さんは笑った。あんな慣れた手つきで触れているのに、そんな姿に愛おしさを覚える。

そんな余韻に浸っていると、藤間さんの体はいつの間にか私の足元にあって、ちう……つと内もものにキスをされた。

「あっ、ん……♡!」

「もっと、してもいいですか?」

「え、待って……、いったばかり、」

「おじさんは体力がないから、もう少しこっちで頑張らせてくださいねー……」

スカートと下着を下ろされ、はだけたブラウスと腕に引っ掛かっているだけのブラジャーだけの姿になり、藤間さんの目の前に秘部が晒される。明るい部屋ですべて丸見えになって、恥ずかしいのに、藤間さんの

視線にとろりと中から零れてしまう。

「……おしりまで垂れて、いやらしいおまんこですね」

「……っ♡」

「とろとろで、すごくおいしそう……」

「そ、そんな、」

「いただきます……♡」

れろお——……っ♡

「あ、あ……っん♡♡」

乳首と同じく、ねっとり舌全体で舐め上げられ、お尻が浮いてしまった。今度はがっちり内ももを抑えられ、熱い舌が何度も下から上へ味わうように這っていくから、絶え間なく襲う快感をすべて受け止めることしかできなかった。